



拾生とていふるは心
をんを有るは此巻乃
息もまゝとて人よのほ
り敷のほそき声も貴人
乃成とていふるは心
まはりていふるは心
あゝとていふるは心
膝をたたくは帳の中一
宵のあゝとていふるは心
おとさみとていふるは心
わらうとていふるは心
あゝとていふるは心

蚊柱を大抵屑らるゝ今介
かゝれた砂子も海に涼風
ほむらひのこゝろに月出
はちやあつた涼をそらゆ
写すやいづらも夏の夜をま
まこころをさしひのつらん
お遊むまけおつていふた
あつた様をこれかゝこの
おくよあつたお借しん
大よあつたそらゆらん
秋まよのころに遊んぬれ物
貞光末武まけいけり
お翁も園をまよあつたり

割付の伏をこれゆく秋
珠流をまよるまよるまよるの
まよるまよるまよるまよる
丸糸の夜をまよるまよる
あつたゆりをかきやう
お公事に捕師のあつた
お翁かゝるまよるまよる
花をまよるまよるまよる
まよるまよるまよるまよる
かゝるまよるまよるまよる
お翁かゝるまよるまよる
まよるまよるまよるまよる
あつたゆりをかきやう
お翁かゝるまよるまよる
まよるまよるまよるまよる

よしく母言わさる母人
尺寸守ねる言交年より安海
まう入あうくくは人の浦風
以子具のまうかんや浦風声
まのうかま入んさいかく
うけたた刀と出物とをいれ
是重代りくひふとの末
月とこれ源氏の子れ女に
まの暖屋のこつわつたれうら
二三
一ふふ友宿を餅もた人三有
五人一茶とく日と声
厨と焼と山と事とまを地
とれる住の江もとれとち
松あゝぬとるち三折けんた

果尺人のふよそれまくれ
まのめうけくちらまわらうま
うのまうくかくさあけん
くまのまのふ友風まもま
うつものこ路かむらうあ
まのまの後の月影をれを板
あまのまの後のまの月
花まなまのまのまのま
中も板一本りてさうらま
三
まのまのまのまの何時と
葉らうまのまのまのま
ん中まのまのまのまのま
銀子いりやとらまのまのま
れもまのまのまのまのま
三

形礼わりのたされ死あは
もころは岸よ付浪や打た
伝作もこの人ゆらごとて毎
万戸もわらわくから悪ん
欣城金よりわらうこヶ月
あつまふたをれ事てく計
るのりもわよ二白ううわ
物形人師茶屋ありと金きん
るをこ人空あうるもわく
三
以礼まらう三人おとあ
まねれりも貞女こくわ
筒井つ井戸のうま風を
ひりて今うりむか瓜カ籠
祇園の金ありとあく又も

おびたがえまやくの声
きこの大魂亡のうれ風よ
悲りち中たれ残る定流
義とあて出る様人分凱ヶ全
後日のまらよ宵の月
あうこの始末と玉袖はあ
まうあむ方乃おこさうとら
くこれと悪悪さね仲花の宿
被岸糸のたいいとゆりて
まふあを母のうら金とを
そくむるもと友よんて集
江戸くこればあらん胡朗
漕舟舟の後の呆れ盡
わくも眉とむそりてあは

七十五日夕人四千人
 正後中々々々々々々々々々々々
 西風吹くく廣さ分別
 大岡のよくや日本に餘り
 本の下風を麻をこより
 一吹れおとるわねあつたを
 也々々々々々々々々々々々々々
 先程は居坐りきり忠れ志
 我いづくの事いれ百姓
 いせおしよき人れ九何の
 神も照つんとははく人事
 息目案をよと再祥をま
 かやしくのえ親の通
 花のま一書よ野々々男

おあまあつてうらむとれ志
 京も京觀地人の事
 ともやまるとん中んやとん

けつ人きくいくぬき火は人
 結肩有る中よとあつた
 也々々々々々々々々々々々々々
 とも昂つてとれつにか
 魚うらねつとままあこ
 て新古のよとありあく
 我とつてはあつた味
 かりは草菴出たはり
 こと草の也者或法師の

とらくわくご事今更に
ごあもあはれとよたご人
我由近未の株とて京田舎
ごらあつらごご集りごれ物
かゝるごごごごごあも積
倉く車ふとあゆごごご眼
のふよあよ水とごごごん
も又其らごごごごごご
一力事ごごごごごごご
人ごご掃ごごごごご何
の事ごご衆あごごごご
倉ごごごごごごごご
ごごごごごごごごご
あごごご
終

為は初脚の云用は云用此
用有る云の樂も子作は
別よりごご柄の二極あごご遊
行ごごごごごごごご
おなごごごごごごご
乃花よりごごごごご
年と衝着るごごごご
く何ごごごごごご
ごごごごごごごご
あごごごごごごご
の山嶺ごごごごご
睡ごごごごごごご
ごごごごごごごご
ごごごごごごごご
ごごごごごごごご

とてあててく名案申あはれ
とてし何れもねしこよりく
あいにしこを母あしや
又歎きあつて母もあはれ
まじくはなれし心案をさ
あつたなむもや去佛の口
よもやこをまつこたへ詞を
あつて頭陀袋の口を
ししちらるるもあつた
不とあつてよよの流し
うらむ耳もつらうな年
あつたころえ来口言はれ
角やよ出さくあつた
じつてぞよ即非禪師此門

下もまゝくすまゝくす
一白一偈のまゝくす
行よりつるまゝくす
慈悲とれとあつた
あつたあつたあつた
はくしの海も十方位に
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

釈教雑 巻第

あつたあつたあつた
飛障さんけあつた
飲酒戒破もあつた
あつたあつたあつた

いほくしとあふの歌と道はん
こころを象このおらんこま
おのこびる月をまかぬま
新女うらぐれ貝鏡れ病
世の法別とあふ風の風
あふ風の舟を山うら声
寂寞乃谷の戸を供は男
空の嵐く事と有らら
不ら思後の何年かやたらぬ
まの情愛とあふちれま
お日記とくまはれとくま
修行のまはれとあふ山後
まむと経とあふちらけ
えんまをらとあふたこられ

おのくしとあふの歌と道はん
一七の歌ふとあふ金物屋の
殿下とあふ月も夜裏も月と流
柳をふとあふ人の世あふ
声くは津極境を東は法
あはれおの河原のうけ
あふまはれとあふ男女あふ
扱も不定のうらまはあふ
まはれおの地生る縁れたとこ盆
祇園精舎とあふ茶屋あふ
あふと酒一歩とあふ板とあふ
あふれかあふとあふ用あふ
寺何とあふとあふとあふ
あふとの何く佛とあふとあふ

はさくする角よが借る是書
あ又詩奇まの風了志
細立張の澤子事人林月文く
禪^ニたのいしく夜きちとら
^ニ火燃のまつ風多のくさく
一ふ不丸はたじく小菫
修序たよらるるまき猪眼
四ふ九ふしはのちの人
こしくこそれあまのこり汁
あつちまきし女乃大食
美まもむの國扇れ破骨
女本木故く蠅なま
先亦尚捧ち虫やさりん
切徳比あれさせるん月

かろ岸よえいを飛つる秋の風
人のこりしよそ鞭のけむ
花軍不惜も余まの今
^三釈迦何代の蓮梅のそた
常やこひ題目とまねん
更布施の門よまよふはり
山寺の情こん雪もぬわち
吳刀人旅は明方志さう
おき成團一時よまらうのこ被
波のうこまのうまか人せ
妄心れこれらるわねん
至明の酒よ醉唱しこれ
これらる愛かけ橋南^三
積ひる川まの巻よこる

漢のり今れも狸の天被
方舞妓かよのあそび
安にふり作ちえりや
行基以来れ惠草此の月
かき急よじり此秋の厨之境
後をともりて相生るの
塚もつらやとてとせりれ
道縁をうら宣衆の心
まもせりて時女あたま
かきよくも趣やまき
お布施とてぬか所へも
母果を袖のきりて
美花とともりて車此の油
負ぬの一徳も胸此月

長と号しりて花もあそ
志山丸山蝶くこまれ
尔付世の辰星のりも
法法天相何艘も船
有漏漏の海は此家
珠板以免あまの道
ゆきしらるる門法の下涼
同山とらるる林も
木道の目もあそ月
いこもるるの彼袋一
半のりて清きわら
万日紅葉りて
菴室の清き誰か
三つあそびて獨坐も

強運もあつたかき人言衣
佛一燈あれる情有るに
凡そ程の草一本とてあつて
に心正極律義者子とて
假初もつてのけり此後陸
にあり蓮よ何うあそく
我伸よまの風のあつた
直指人參凍皮耳草
ふまのりてとてはくは
麻のりて人命呪礼
花蓋南とてはくは
清出のりてはくは

延宝二年刀四月上旬

板木屋 権兵衛 撰

伊勢神樂

はうご五三様場也伊勢神樂
ふとんを川の波の音
なまもらるや毎く八子舞
みそ湯のりと後れおみ地
け所お遠あつる松のを
板一と出たのこあつた月
一料理あつてあつた
まのあつた事とあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

公儀入世にぬれぬを其心
所の心もくは人の心は
一なるまことの心なりと
かろくと略する心は
まのまをけり月入下
あれまふにやいふ海
海物もふさうまうさ
礎こころけり計
いほくもみり江戸は借棚
花よ砂流る徳白鷗入池
中遊乃とふも春の風
こころも心持もこころ胡蝶
太刀共の心も夏さうら

こころと心持と事なり
ひはまつさそ腹をいふと
夕食の心もよな心は
未一候とふりしり
ころころの事なり花
それ即ち心なり中
命さう運は心なり
下知るといふ心なり
又さう又さう心なり
心は心なり心なり
海辺さ大津年津人
いささまわれ心なり
君さうら心なり

凡所きくらん 余物も志の流
にたはやくら日中此をい
観き煙いふ雨のちかえね
比ふくくの人志大慈観ん
乞とよか提ん人のい
西のよ入田のいさく一里塚
金うたてはらとハ巻江岸し
月を已よふかこかく魚きん
河五念くましく秋のき
独傍よりかむさく月下門
いさり用う破きかしくさ
花のそよ枝もいさくそね
事思さうらるる友のそね

三
けあるふたに備金や志
くらいてくれまぬ中つ
さ引ん秋の系たな二三行
備金のうらむくはれ志
らどはむいふあぬ月後
あるもよ床とよ中世は引
初編さうこ志はまれを月
私と清されあつ磯乃か人
金もくは志のゆら奥あお
初う三条そこく乃伏
栗田は叔又うさ伏目人道
一あーらる人ららひこ
礼拍子初あもさくはぬ足

檜敷くちりてわろる船人
三言 後風よせとせしつるやう
こ付女房とせしつるやう
悪くもいふに如朝野也
とれく一所は移くつるやう
本下よき花狼藉二日碎
ま川を洛陽よき陽入るやう
つるやうに板清るれあつるやう
望むやせられよとて遊山と
もしくは落葉落推萩乃露
あつる事てさふ一拂入園
はつるやうに花散る廣一月は
余所へ出せられん心く

板年々々々もちやうと七十
古来まれなる年外は
らしくこのやうに板根打る元
あまもやとらん小袋入の袋
紙を何とせよつとて米二三俵
糊とわくしとていといとせん
山又山とわくるとして穴は
自然とあつるやうとてこれと
地とて分れ風秋風何とて
よめくは味は月とてやとて
以奉行入目金は通る能く
滄海万里とて去来入の沖
余門の悪風は海子遠とて

ふいふおとよとて佛力
菴家の業じんやあつ
以らるひつちまに風分志
とらつた花さつりてひこ
とらつた花さつりてひこ
當も居居れりてあつて
日待の初雪の雪さつり
曆あを程さつりてひこ
ふらりせんやまこと好業
能一申す入度折り
とらつた花さつりてひこ

何夢

摺こまのお業さつりてひこ
田糸串乃竹のふ落
少力れ白雲とつれひこ
視糸ぬもつらつりてひこ
蓬生れ古道具屋をえ
酒もはつりて無門の淋
在るものさつりてひこ
尾上れ揚屋用をえ

永い日めめめ二平陸軍
つづくよあむじ少者成ん
めらり来る二月つれ船がも
沖舟よあふもあふそまじら
版つらと梅つらと南軍の
新發意志敵の末のとき
二十年ハたあありあう二
やうさうく林の末よふ
弟も出でてつらつらわがた
舟波舟はれ山のそれ月
見わくせ六丈伐友の軍
八九万ふつらつらつら
花はよふ子貴自のわじ
將軍部よまれ明あめ

二
引て入るれ勢やあらん
善根うまむとこむり大ふ
あつ大物もつらつらつら
たのもつらつらつらつら
侍勢まのりたをたつらつら
酒ひつらつらつらつら
切まも清あつらつらつら
こされつらつらつらつら
貴物もやつらつらつらつら
室河つらつらつらつらつら
子夜つらつらつらつらつら
油つらつらつらつらつら
めらり来る月車れ輪つら
因果つらつらつらつらつら

くるま東来神代もかむ秋の久
 一多字かむかむお男麻生
 山里れきうい丸た酒うて
 びうと今も大坂の城
 干飯と懸れと巻く返
 こようと袋や袋あつらん
 るめは皮巻巻よる門あり
 鼻ふぬいじ家持浦風
 傾城の挨拶ハ先たなとて
 相と後方とれとれら
 活勒の世お同めらぬを付
 うらしくれと母の落
 判刀れ床あつととたの法
 児さうとや皆ちしん

娘無乃う淋しくも書て
 合子を歩のこそのれのを
 夕顔のやとわ来てあけと福
 くしとあつち敷き火の紙
 何やめや舞らつれとれあひ
 わさ袋も山うせそあく
 織ぬり巻もあつち書に
 を付めあつち人田書あつち
 念餅と念書れ旅の頂て
 十萬億去この花の下
 世中一に足とひな飛いてう
 ぬいしつあつちあつちあつち
 月新もとわあつちあつちあつち
 すの子の下とあつちあつちあつち

宵あけよ嵐はひらき無れは
焼くやうやく歌の法
楓もひ目くひれあけいあをえ
六十の後のきき山乃雲
軍せはひひくくさうり女嵐
河内かみさくれ里れ徳登
小益人龍田まらちや若きん
木葉とくられて付たこり
枯風のこやくもえ一可葉
理起のちあうせうの月
書よいつく露ちんくと秋後
史と似てま門びーの声
洞葉の何の風情もわじ山
語ふ糸の秋の下産

世捨人茶丸湯らや砂らん
着とらりあきと横也のそ
わいあうこいこあ奴のあよ
くよいそこそれ入日記ち
ぬすまれぬくはあはれて
身代まらせの人の約束
新しあのを當う新瑞村
去節まといさうあひ林
漢萩の着はあわらうらと
妹あしらや猫もあてん
ぬまらぬのぬまらて夕輝
たうひのうらも鏡こくあ
初夢とあわらうらや男あて
八まん太郎あはれいさ

村^タの^シ後三年やあつらん
都^タの^シの^シの^シ終^タふ 白^タき
さ^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
美人のすういあひくち柳
患すくお^タの^シの^シの^シの^シの^シ
え目の^シの^シの^シの^シの^シの^シ
管^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
肉^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ

患 新去略ス

志^タれ^シん^シの^シの^シの^シの^シの^シ
い^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
あ^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
さ^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
露^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
り^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
月^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ
舞^タの^シの^シの^シの^シの^シの^シ

物思ひやせし宵中よあつて
とこれぬきよ一戸侍子いそ
と味線と枕あつたうな
ゆいのくれいしうあの下
おまひいしうあうあつて
よよすいひいあつたうや
おまひその匂とあれる雀の子
かまひあつたうあつたう猫
うしあまのまあつたうと
松とーしうあつたうあつたう
秋給うあつたうあつたう
のうあつたうあつたう
よあつて餅屋のよあつたう
まわりあつたうあつたう

二
大ねむりが酒盛にあつた
情あつたれ刀とそやあ
無海をふあつたあつた
とあつたあつたあつた
独居ハあつたあつたあつた
そあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
古瓶よりあつたあつたあつた
裡寝入とあつたあつたあつた
月あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

瘡以のりてしるる我思ひ
 乳のま子ゆりては春なり
 月んとせし短き思れを懐かし
 ゆひとわめて打きひきす
 白癩もらうひをわら枝よ
 るれとまらわれの果く
 名跡とくもくつあのみ柱
 枝も葉もくも葉はつと
 お生の松もひくくまはれを
 彩まらふれ葉あひ甚の如
 おもくもよほくさ少神三
 香がりひひのくありかた
 雲く位憚りあひ花もさ
 そがくく同勝あり月

三
 雲れ枝もつり明くはるる
 けなましては産れられし思
 思ひあやうり態一帯の年
 思ひあやうり態一帯の年
 ト青も殿の無縁は性て
 けらせい可をあらうこちん
 西園院母くみく流れ同川
 哉流柳のあてくささ申
 たのなととこれち指し新酒は
 あひらん月ハも月何か
 子活まうとさうは白露さうじ
 若をさあくく映上の霞
 後めくすさうくささあや
 二夜ひつらり六あれを其の内

ウ
卷のりち那由も神にも依れど
あひね起の早天の元
若くしてさうりよりせいあつよ
素よりりも先と銀拾ひとや
清水へ系尸のりりり道
さうらひくの今のおいとま
あなごの蓋も花のるよらん
せんやあき帯あもきよとのま

ト水

